

アクション・リサーチ再考：一般化の問題に焦点を当てて

藤田卓郎（福井工業高等専門学校）

E-mail: takuro619@gmail.com / WEB: <http://www.takuro-fujita.com>

1. はじめに

a) これまでの英語教育研究：

- 実証主義(positivism)に基づくものが中心
- 英語教育研究と実践のジレンマ
 - 研究は教師の悩みに答えてくれない(磯田 2005)
 - 実証研究としての厳密性の追求→実践（環境）との乖離(酒井 2011)

b) 反省的実践の必要性

- 反省的実践の 1 つとしてアクション・リサーチ(AR)
 - AR に対する誤った理解
 - 様々な批判（例：結果の一般化ができない 等）

c) 本発表の目的

- AR についての概念の整理
- 結果の一般化についての検討

2. AR とは

a) AR の定義

- 様々な定義
 - 「自分の教室内外の問題及び関心事について、教師自身が理解を深め、実践を改善する目的で実施される、システムティックな調査研究」(横溝 2000, p.17)
 - 「ここで取り上げるアクション・リサーチは (中略) 実践の文脈の中から解決すべき問題を発見し、それに対する解決のサイクルを前進させることによって、実践上の現実的な変化に寄与することを志向するものである。このようなサイクルを通じて導きだされた知見は、実践固有のものであると同時に、その文脈性を描き出すことを通じて、一般化が図られていく」(島田 2008 p.92)

b) AR の特徴

- 教室内外の問題点の改善、状況の理解
 - 実証主義研究：先行研究の分析・研究発表・研究会等から問いの生成(浦野 2013)
 - AR：指導していて気になっていること、困っていること、「こうなってほしい」と思うことから問いを生成 (佐野 2005)
- 問題解決の過程の重視
 - 実証主義研究：直線的な研究プロセス
 - AR：研究の経過に応じて柔軟なプロセスを踏む
- 深い内省
 - 内省とは暗黙知である教師の知を意識して言語化する行為(八田 2000)
 - 内省を行うことで可能となること (ショーン 2001)
 - 暗黙に行ってきたことに焦点を当てて再度見直すこと
 - 自らの指導する文脈における独自の理論の生成
 - 授業中の省察・授業後の省察の必要性

c) ARの手法

- ARは「リサーチ」と呼べるのか
 - リサーチの構成要素 (1) a question, problem, or hypothesis (2) data (3) analysis and interpretation of data (Nunan, 1992, p.3)
 - 後述する流れより、ARは(1)~(3)を満たしているとは言えるのではない

- 一般的なARの流れ
 - 島田 (2008)
 - 1) トピックの明確化
 - 2) アクション・プランの策定
 - 3) データ収集・分析
 - 4) アクション・プランの評価
 - 5) アクション・プランの修正
 - Burns (2010)
 - 1) 計画 (plan)
 - 2) 行動 (action)
 - 3) 観察 (observation)
 - 4) 内省 (reflection)

- ARの分類：仮説検証型AR・課題探求型AR
 - 仮説検証型AR (佐野 2005)
 - 1) 問題の発見
 - 2) 事前の調査
 - 3) 研究課題の設定
 - 4) 仮説の設定
 - 5) 計画の実践
 - 6) 結果の検証
 - 7) 報告
 - 課題探求型AR (横溝 2000)
 - 1) トピックの明確化
 - 2) 予備調査・情報収集
 - 3) 行動方略の発展・立案
 - 4) 行動の実施
 - 5) 行動結果の観察・分析
 - 6) 行動の内省
 - 7) 1) ~ 6)を授業ごとに繰り返す
 - 8) 総括的振り返り
 - 9) 報告

d) ARの問題点

- ARのための時間の確保
 - 教師（特に中学校・高等学校）は多忙
 - 日々の忙しさに追われ、ARへの意欲が減退 (三上 2005)
- ARのもつ苦しさ (今井 2009)
 - 思ったような結果が得られなかったときに学習者に原因を求めてしまう場合が…
 - 自らの実践を批判の対象とする苦しさ
- ARのハードルの高さ
 - 問いの設定からデータの解釈まで基本的には1人で行うことに…
 - 専門的知識に基づいた意思決定が必要となることも…
- 研究としての信頼性
 - ARは「お手軽な実証研究」と呼ばれることも(柳瀬 2008)
 - 変数統制や参加者の無作為抽出が困難
 - 研究としての厳密性・再現性の確保が困難
 - 限られた文脈における実践であり、結果の一般化が困難

e) ARの問題点の指摘に対する疑問点

- ARは苦しくて時間の確保が困難→ARとは机上の空論であり実施不可能なのか
- 研究としての信頼性→ARは学術的な研究の知見の集積に貢献できないのか

3. 一般化についての議論

a) ARはそもそも一般化を目的としていない

- ARは教師の指導環境に根ざした研究
- 一般化しないからこそ様々な点に焦点を当てて分析を行うことが可能(玉井 2009)

b) 「一般化」の意味が異なる

- ARの一般化は読者が共感したときに発生する(佐野 2005)
- 「自分の環境でもこの手法を試そう」→「ある意味での一般化」(佐野 2005, p.12)

c) 事例の集積があれば…

- 個々のARの一般化は不可能だが…
- 事例の集積によってパターンが見られるようになるのでは(佐野 2005)

d) 問題点(曖昧な点)

- 一般化の定義が曖昧
(結果の一般化という概念：主に実証主義に基づいて指摘されていると思われる)
- 一般化の可否についての議論 < ARは知見の集積に対してどのように貢献できるのか

4. 構造構成主義の観点から

a) 認識論の違い(住 2010)

- 実証主義に基づく研究：
 - 実存論：自分たちの認識している世界の外に独立する客観的世界が存在する
 - 無作為抽出+変数統制によって標本を抽出し、変数の影響を厳密に調査する
- AR：一種の事例研究
 - 観念論：自分たちの認識によって世界は規定されている
 - 文脈のもつ意味や特徴を明確にした上での研究
- 異なった認識論に基づく研究間での知見の集積のために…構造構成主義(西條 2005)

b) 構造構成主義的の観点から：仮説継承(田中・山西 2003, 山西・田中 2004)

- 仮説継承のプロセス：仮説生成→仮説検証→仮説継承→仮説検証…
 - 仮説生成：質的データの積極的解釈、主観の活用
 - 仮説検証：生成された仮説について、推測統計等の手法を用いて厳密に検証
 - 仮説継承：検証された仮説をさらに多様な解釈の元に戻し、知見の発展、精緻化を図る

c) 仮説継承のプロセスから考えるAR

- 仮説生成：ARは特定の文脈における現象説明の理論生成や教師独自の理論生成の役割有り
- 仮説検証：変数の統制、無作為抽出といった手法は(倫理的にも)不可能
- 仮説継承：既に検証された知見を教師の指導環境に応用、指導法の評価(ARそのもの)

5. 実践研究の観点から

a) 探求的実践(EP)の観点から

- “think globally, act locally, think locally” (Allwright 2003, p.115)
 - think globally: 指導している文脈を取り払って考えることによる根本的な原理の探求
 - act locally: 原理を実践者の固有の文脈の中で試行する
 - think locally: 試行錯誤の結果について考察→原理についての考察の深化・発展へ

b) 臨床心理学研究から

- 実践研究の種類：実践を通しての研究と実践についての研究
 - 実践を通しての研究：「現実介入する実践を行いながら研究するあり方」(下山 2008, p.5)
 - 実践についての研究：「…研究者が実践活動そのものから離れ、実践活動を客観的対象として研究するあり方」(下山 2008, p.15)
- 実践を通しての研究と実践についての研究の関係
 - 実践を通しての研究：仮説やモデルの提示
 - 実践についての研究：モデルの検証

6. まとめ

a) ARの再整理

- AR = 「お手軽な実証研究」はもう卒業
- AR は実践者の固有の文脈についての理解や問題解決を狙った一種の事例研究である

b) 結果の一般化について

- 一般化=「統計的一般化」であればARの結果の「一般化」は不可能
- ARが研究の知見の集積、発展に貢献するポイント
 - 現象理解のためのモデルや仮説の提示
 - 検証された知見を固有の文脈の中で試行し知見の発展、精緻化を図る

引用文献

- Allwright, D. (2003). Exploratory Practice: rethinking practitioner research in language teaching. *Language Teaching Research*, 7, 2, 113–141. doi:10.1191/1362168803lr118oa
- Burns, A. (2010). *Doing action research in English language teaching: A guide for practitioners*. New York: Routledge.
- ドナルド・ショーン(2001)『専門家の知恵』(佐藤学 & 秋田喜代美 訳) 東京: ゆみる出版
- 八田玄二 (2000) 『リフレクティブ・プラクティスによる英語教師の養成』 東京: 金星堂
- 今井裕之(2009)「授業を理解することへの2つの接近-授業者として観察者として-」吉田達弘・玉井 健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介(編)『リフレクティブな英語教育をめざして: 教師の語りが拓く授業研究』 東京: ひつじ書房
- 磯田貴道 (2005)「理論と実践の架け橋としての授業設計」 *Dialogue*, 4, 1–14.
- 三上明洋 (2005)「アクション・リサーチ実践者育成のためのオンライン英語教員実施システムの開発」『中部地区英語教育学会紀要』 35号, 83–90.
- Mikami, A. (2011). Changes experienced by teachers through action research in an in-service EFL teacher education program. *JACET Journal*, 53, 57–64.
- 酒井英樹 (2011)「英語教育学に関わるジレンマの克服に向けて」『中部地区英語教育学会紀要』 40号, 299–306.

- 西條剛央 (2005) 『構造構成主義とは何か：次世代人間科学の原理』 京都：北大路書房
- 佐野正之 (2000) 『アクション・リサーチのすすめ-新しい英語授業研究』 東京：大修館
- 島田希 (2008) 「アクション・リサーチによる授業研究に関する方法論的考察—その意義と課題—」 『信州大学教育学部紀要』 121, 91-102.
- 下山晴彦 (2008) 「何のために研究をするのか-研究の目的と方法」 下山晴彦・能智正博 (編) 『心理学の実践的研究法を学ぶ』 東京：新曜社
- 住政二郎 (2010) 「質的研究の科学性に関する一考察」 『外国語教育メディア学会(LET)関西支部メソドロジー研究部会 2010 年度報告論集』 30-44.
- 玉井 健(2009) 「リフレクティブ・プラクティス-教師の教師による教師のための授業研究」 吉田達弘・玉井 健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介 (編) 『リフレクティブな英語教育をめざして：教師の語りが拓く授業研究』 東京：ひつじ書房
- 山西博之・田中博晃 (2003) 「英語教育学研究における質的研究と量的研究の融合—仮説検証から仮説継承へ—」 *Language Education & Technology*, 40, 161-173.
- 田中博晃・山西博之 (2004) 「言語データの質的な取り扱いにおける客観性と一般化可能性の問題—仮説軽症型アプローチによる克服の可能性—」 *Language Education & Technology*, 41, 77-88.
- 浦野研 (2013) 「『よい研究』の条件と種類」 第 43 回中部地区英語教育学会富山大会「英語教育法セミナー：研究法、データ分析法、論文を書く際の注意点」 発表資料
- 柳瀬陽介 (2008) 「Exploratory practice の特質と「理解」概念に関する理論的考察-アクション・リサーチを超えて-」 『中国地区英語教育学会研究紀要』 38 号, 71-80.
- 横溝紳一郎 (2000) 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』 東京：凡人社